

1	名古屋	藤が丘小学校	イトウ マサユキ 伊 藤 真 之
分科会番号	14	分科会名	特別支援教育

研究題目 自分から正しく発音する児童の育成
～認知・運動能力の向上と伝わる経験を通して～

1 研究のねらい

本学級の児童A・Bは、学級の友達と良好な人間関係を築くことができている、自分から積極的に関わろうとする姿が見られる。しかし、会話をする際に「サカナ」は「タカナ」、「センセイ」が「テンテイ」になるなど、正しく発音することができず、自分の思いを言葉で伝えても友達に伝わらないことがある。その上、自分の発音が不明瞭で言葉が友達に伝わっていないことに気付いていなかったり、伝わらなくてもそのままやり過ぎたりすることも多い。

正しく発音することは、自分の思いが正しく伝わって対人関係が豊かになり、より充実した生活を送ることにつながる。児童A・Bにも自分から正しく発音して相手に分かりやすく言葉で表現する力を付けてほしいと思う。

「自分から正しく発音する」には、正しく発音することができるための基礎的な力を身に付け、相手に正しく伝わるように気を付けて発音することが大切であると考え。しかし、児童A・Bの様子を見ると、音の聴覚的な認知力や舌や口唇の動きなど、正しく発音するための基礎的な力が身に付いていなかったり、正しい発音で話そうとする意識が低かったりする。

また、池田・菅野・橋本(2009)は、「正しく発音することができない児童に対しては、個々の児童の言葉の発達についてどこでつまずきがあるかを捉えること、言葉の発達を支える①対人関係②認知能力③運動能力（構音器官の運動機能）の三つの要因を押さえることや、正しく発音することで伝わるという経験が必要である」と述べている。対人関係については、自分と相手との間で気持ちを伝え合いたいという密接で良好な対人関係があるか、認知能力については音の聴覚的な認知力があるか、運動能力については、舌や口唇の動きと正しい口形ができるかなどを指している。

そこで、本研究では、自分から正しく発音することができない児童に対し、先に述べた「対人関係」「認知能力」「運動能力」のうち、「認知能力」「運動能力」を高めることと、良好な対人関係の中で正しく発音することで伝わる経験を得る場の設定を手立てとして、以下の内容について検証する。

自立活動の授業の中で、「認知能力と運動能力の向上」と「正しく発音することで伝わる経験を得る場の設定」を取り入れることが、児童が自分から正しく発音することに有効である。

2 研究の構想

(1) 対象児童

知的障害特別支援学級に在籍する児童2人（以下児童A・B）

(2) 児童の実態

新版構音検査を行った結果、各児童の発音における実態は以下の表（濁音、拗音などは除いた簡略化した表）のとおりであった。色が付いている平仮名が、不明瞭であることを指している。また、児童A・Bどちらも聴力検査には、問題はなかった。

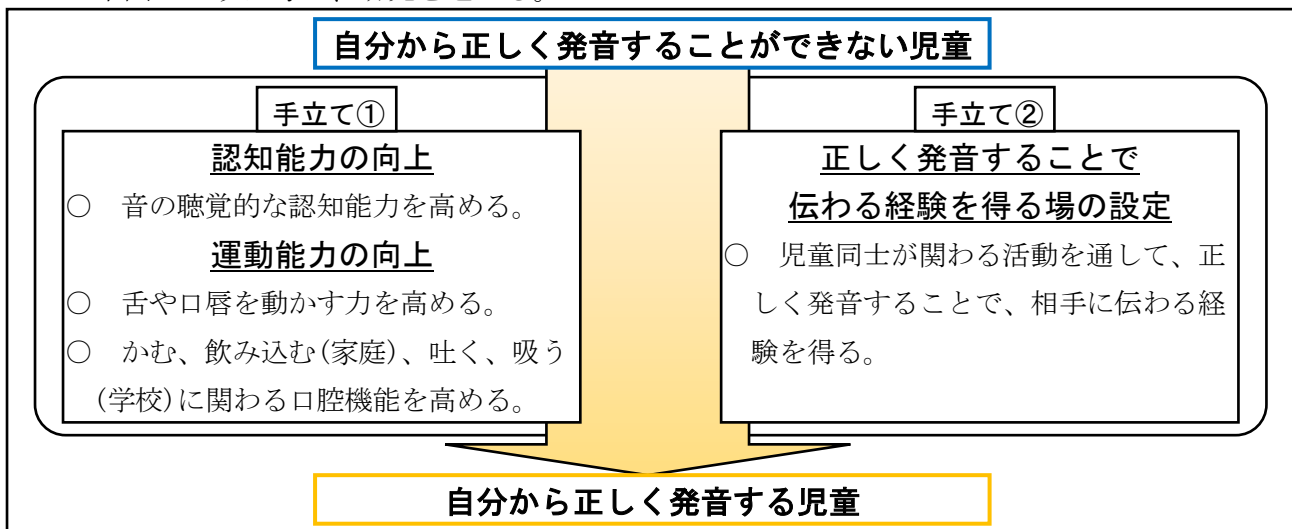
児童A										児童B									
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	り		み	ひ	に	ち	し	き	い		り		み	ひ	に	ち	し	き	い
を	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	を	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え		れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

児童の姿（○できること ●苦手なこと）

児童A	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分から友達や先生に話し掛けることが好きである。 ● サ・ハ行の摩擦音と、ラ行の破擦音が苦手である。 ● 息を吹く力が弱く、舌を上手に動かすことが苦手である。 ● 発音が不明瞭なことに気付かず、相手に伝わらないまま話を続け、会話が成立しないことがある。
児童B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 性格が明るく、友達と関わるのが好きである。 ● ナ・マ行の鼻音が特に苦手である。 ● 全体的に不明瞭さが多い発音も多く、口を閉じてから発音すること、舌・口唇を動かすことが苦手である。 ● 話したことが相手に伝わらないことが多く、伝わらなくてもそのままやり過ごすことがある。

(3) 研究構想図

下図のように考え、研究を進める。



(4) 手立ての具体

「認知能力、運動能力の向上」における手立てと、「正しく発音することで伝わる経験を得る場の設定」の手立ての具体を以下に記載する。

手立て① 認知能力、運動能力の向上

認知能力

- ・ 音の聴覚的な認知力を高めるために「平仮名かるたゲーム」を行う。
- ・ 自分の発音を確認するために、ICT機器を活用する。

運動能力

- ・ 舌と口唇の動きを高める練習を行う。
- ・ 息を吸う、吐くことの口腔機能を高める運動を行う。

手立て② 正しく発音することで伝わる経験を得る場の設定

正しく発音することで、相手に伝わり、楽しい・うれしい気持ちになる経験を積むために児童同士が関わり合うゲームや、言葉で自分の気持ちを伝え合う場を設定する。

3 研究の内容

(1) 実践1 「認知能力、運動能力の向上」

ア 実践の様子

認知能力の向上

平仮名が書かれたブロックを机に並べ、教師や友達と「平仮名かるたゲーム」を行った【写真1】。始めは教師が発音した平仮名とは違うブロックを取る姿が見られた。一つ一つの平仮名の音を一緒に確認し、何度か取り組んでいくと正しい平仮名ブロックを取ることができるようになった。また、児童A・Bが苦手な音の平仮名ブロックを用意して聞き分けるようにすることで、音の聴覚的な認知力を高めるようにした。さらに、教師だけでなく、児童が発音して行うようにした。その際、教師が児童の発声をサポートしながら児童A・Bで交互に平仮名を発音してかるたに取り組むことで、児童同士で関わり合いながら楽しくできるようにした。正しくかるたができるようになると、休み時間には他の児童を誘ってかるたをする姿も見られた。

次に、児童が自分の発音を確認するためにタブレットPCを活用した。タブレットPCの録画機能を使って、自分が発音した平仮名の音が正しいかを教師と一緒に確認するようにした【写真2】。児童A・Bは、自分が発音した音を確認したり、教師の正しい発音を聞いて自分の発音と比較したりすると、「サが違う。」「先生と音が違う。」などと自分の間違いや課題点に気付く姿が見られた。また、発音するときの教師と自分の口形の違いにも気付くことができた。児童A・Bは、口形、



【写真1】平仮名かるたゲームをする様子



【写真2】タブレットPCを使って発音を確認する様子

息の吹き方、舌の使い方について気を付けると、正しく発音することができる平仮名が増え、録画を見て、「今度は合っているよね。」「間違いが直った。」と正しく発音することができたことに喜ぶ姿も見られた。

運動能力の向上

舌と口唇の動きを高める「舌と唇じゃんけん体操」を行った【写真3】。始めに、絵を見ながら模倣したり、鏡を使って絵と同じ舌や口唇ができているかを確認したりして舌と口唇を動かすようにした。絵と同じような舌と口唇ができるようになってきたら、音楽に合わせて、絵に合った舌や口唇の動きをする「舌と唇じゃんけん体操」に取り組んだ。また、実際に舌と口唇を使ってじゃんけんをすることで、児童A・Bは、楽しく活動に取り組む姿が見られた。「舌と唇じゃんけん体操」を行った後に、正しく発音することができるように一つ一つの平仮名を舌と口唇の正しい動きを確認しながら発音した。児童A・Bは、体操をする前に比べると、舌と口唇を少しずつ正しく動かすことができるようになっていた。



【写真3】「舌と唇じゃんけん体操」の絵

次に息を吸うこと、吐くことの口腔機能を高める活動を行った。まず、紙コップ、ストロー、袋を使って作製した「袋人形」を膨らませたり、縮めたりする活動に取り組んだ【写真4】。息を吸うこと、吐くことに関して、強弱を付けることができるように、太いストローと細いストローを用意した。太いストローは、取り組みやすいため、児童は簡単に「袋人形」を膨らませたり、縮めたりすることができた。児童A・Bは、「膨らんだよ。」「小さくなった。」と楽しそうに取り組むことができた。太いストローに慣れてきたら、細いストローの「袋人形」に取り組んだ。太いストローに比べると、細いストローは息を吸ったり吐いたりする力が必要になるため苦戦していた。継続して取り組むことで、できるようになるとうれしそうに何度も膨らませたり、縮めたりする姿が見られた。



【写真4】「袋人形」を膨らませる様子

また、息を吐くことに関しては、児童A・Bどちらも苦手であるため、より改善できるように「スポンジ落としゲーム」に取り組んだ【写真5】。これは、机に置いたサイコロ型のスポンジにストローで息を吹き掛けて落とすゲームである。この活動も、太いストローと細いストローを用意した。児童A・Bは、太いストローで息を吹くと、サイコロ型のスポンジが転がって机から落ちる様子を見て、楽しそうに多くのスポンジを落とす姿が見られた。児童はスポンジが転がるように息を吹くことができていた。活動に慣れてきたら難易度が高くなる細いストローで取り組んだ。「袋人形」のときと同様に、細いストローでスポンジを落とすことに苦戦していたが、何度も取り組むことで息を吐く力も少しずつ強くなり、細いストローでも多くのスポンジを落とすことができるようになった。



【写真5】「スポンジ落としゲーム」の様子

イ 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 「平仮名かるたゲーム」に取り組むことで、正しく聞き分けたり、発音したりすることができる平仮名が増え、音の聴覚的な認知能力を向上させることができた。
- 「舌と唇じゃんけん体操」に取り組むことで正しく舌や口唇を動かすことができるようになり、「袋人形」に取り組むことで息を吸うことや吐くことの口腔機能を高め、運動能力の向上につながった。
- タブレットPCを使って発音を確認する場面では、児童が苦手な平仮名の音については、自分が発音している音が正しいかを理解することが困難な様子があった。認知できる音から順に取り組ませる必要があった。

(2) 実践2 「正しく発音することで伝わる経験を得る場の設定」

ア 実践の様子

実践1により、正しく発音することができる平仮名が少しずつ増えてきたことを生かして、児童一人が、箱に入っているものや写真を見て、見ていない児童や教師に言葉で伝える、「伝言ゲーム」を行った。始めに選んだものや写真は、身近なもの、発音しやすいものにして、取り組みやすくすることで、児童A・Bは、初めてでも楽しんで取り組むことができた。

活動に慣れてきたら、児童A・Bが苦手な平仮名の発音に取り組めるように、ものやカードを選択した。正しく発音して友達と教師に伝えることができたときには、ワークシートに「◎」を記入することで振り返り活動の際に、達成感を味わうことができるようにした。正しく発音することができなかつたものについては、教師と一緒に発音したり、舌や口唇の動かし方を確認したりして、ワークシートに「○」を記入した。児童A・Bは、伝言ゲームをする際に正しく発音することができ、「◎」をもらえるとうれしそうにする姿が見られた。ゲームの終了時には、「◎」がいくつあるかを数えて記録したことで、前回よりも「◎」が増えていることを実感でき、正しく発音して伝わることのよさに気付く姿が見られた。

次に、学級の中で児童が一緒に取り組める「ボール運びゲーム」「ジェスチャーゲーム」をして、その後、互いに気持ちを伝え合う活動に取り組んだ【写真6】。相手に気持ちを伝えるときには、表情や気持ちの言葉が書かれているカードと話型を用意し、児童が気持ちを言葉で伝えるときに取り組みやすいようにした。

児童同士で一緒にゲームをすることで相手を意識することができ、相手に伝わるように自分から正しく発音しようとする姿が見られた。また、何度か取り組む中で、表情カードや話型を見なくても気持ちを言葉で伝えることができるようになってきた。正しく発音をし、相手に自分の気持ちを伝えることができ、友達に「ありがとう。」と言われると、うれしそうにする姿が見られた。



【写真6】気持ちを伝え合う様子

イ 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 「伝言ゲーム」では、正しく発音して相手に伝えようとする姿が見られた。また、「◎」をもらえることで達成感を味わいながら取り組むことができた。
- 「ボール運びゲーム」「ジェスチャーゲーム」という、児童同士で一緒にゲームをする場面を設定したことで、相手を意識することができ、相手に伝わるように自分から正しく発音しようとする姿が見られた。
- 気持ちを伝え合う活動では、表情カードの言葉や話型を読むことに意識が向くため、どのように伝えようかと自分の言葉として考えさせる工夫が必要である。

4 研究のまとめ

実践後に、実践前と同様の検査をした結果が以下の表である。(色付き平仮名：不明瞭数)

<児童Aの変容>																			
実践前 (15)					実践後 (10)														
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	り		み	ひ	に	ち	し	き	い		り		み	ひ	に	ち	し	き	い
を	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	を	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え		れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

<児童Bの変容>																			
実践前 (24)					実践後 (18)														
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	り		み	ひ	に	ち	し	き	い		り		み	ひ	に	ち	し	き	い
を	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	を	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え		れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

自分から正しく発音することができない児童に対し、手立て①を講じたことにより、児童A・Bともに、不明瞭な平仮名の発音が減少した。また、手立て②を講じたことにより、児童A・Bともに、自分から正しく発音しようとする姿が増えた。これらのことから、自立活動の授業の中で、「認知能力と運動能力の向上」と「正しく発音することで伝わる経験を得る場の設定」を取り入れることが、児童が自分から正しく発音する児童の育成に有効であることが分かった。

実践後、児童A・Bは友達と遊ぶときや教師と会話をするときに、言葉を使ってコミュニケーションを取ることが多くなった。児童は、正しく発音することのよさを感じたことにより、日常生活でも発音に気を付けて相手に言葉で伝えようとするできるようになってきた。

今後も、継続して認知能力・運動能力の向上を目指すことで、正しく発音することができる平仮名をさらに増やすことができるようにするとともに、正しく発音することで伝わる経験も増やすことで、児童が自分から正しく発音し、より生活が豊かになるようにしていきたい。